

神の建造のための祭司職の回復

(主日——午前の第二の部)

メッセージ 8

神の建造のための祭司職の回復

聖書：啓 1:5-6, 5:9-10. I ペテロ 2:5, 9. エペソ 2:21-22, 3:16-17 前半

I. 主の回復は、祭司職によって実際化されます。実は、主の回復は、祭司職の回復です——ゼカリヤ 3:1-5, 6:12-13. ハガイ 1:8, 12：

A. 祭司職については、人の側では常に失敗があり、神の側では継続的な回復がありました：

1. 主イエスは祭司であり、彼の贖いを通してわたしたちを彼の祭司職の中へともたらしめました——啓 1:5-6, 5:9-10。
2. 全召会は、祭司の体系であるべきです。しかしながら、この祭司の体系は、失われてしまい、聖職者・平信徒制度によって置き換えられてしまいました——2:6, 15。
3. 召会生活の回復は、真の祭司の生活の回復です。わたしたちは回復されて、この祭司の生活の中へと入らなければなりません。それが意味することは、わたしたちが主との真実な交わりの中へともたされる必要があるということです——I コリント 14:26, 1:9. I ヨハネ 1:3。
4. 主の回復は、祭司となる事柄であって、働きや、運動や、主のために何かを行なう事柄ではありません。
5. わたしたちの責任は、どのような種類の働きをも顧みることではありません。わたしたちの責任は、ただ祭司の生活を顧みて、主によって所有され占有されることを学び、ついにはわたしたちが主で満たされ、浸透され、飽和されるようになることです——エペソ 3:16-17 前半, 19。

B. 今日、主が必要としているのは、一群れの人々が、主の臨在の中へと、さらには主ご自身の中へともたらされて、ついには彼らが主と一になることです——ヘブル 10:19. II コリント 3:18, ヨハネ 17:22, 24。

C. 主がそのような祭司の体系、祭司の王国を持つとき、主は自由に流れ出て、主のみこころを成し遂げ、主の永遠の定められた御旨を成就します——出 19:6 前半, 啓 1:5-6, 5:9-10, 4:11, エペソ 1:5, 9, 11, ピリピ 2:13。

II. 神の家の建造は、祭司の体系と関係があり、また祭司の体系にかかっています——出 19:6 前半, 25:8-9. ゼカリヤ 6:12-13. I ペテロ 2:5：

A. 召会の建造は、聖徒たちが神の御前で祭司職を担うかどうかにかかって

8. 神の建造のための祭司職の回復

います——啓 1:5-6, 5:9-10, ヘブル 3:6, 6:20, 7:26, 8:1, 10:19。

- B. 祭司職は、召会の建造を支えます。祭司職がなければ、召会を建造することは不可能です。
- C. もしわたしたちが神に進み出て、神と交わり、神の御前で生き、神にわたしたちを通過していただくなら、わたしたちは満ち満ちた方法でキリストの豊富を享受し、キリストの栄光を表現します。このようにして、わたしたちは召会の証しを担います。そして、召会の建造は、わたしたちの間で実現します——11:6, Iヨハネ 1:3, エペソ 3:8, 2:21-22。
- D. 神の建造を回復するために、神はまず祭司の体系を回復しなければなりません——エズラ 1:1-4, 7:1-5。

III. 神の住まいとしての神の家の建造は、祭司の体系です。聖なる祭司の体系は、霊の家です——エペソ 2:21-22, Iペテロ 2:5:

- A. 「霊の」は、神聖な命が生活して成長する能力を指します。「聖なる」は、神聖な性質が分離して聖別する能力を指します——5節:
 - 1. 神の家は、おもに神聖な命によって存続します。このゆえに、それは霊のものです。
 - 2. 祭司の体系は、おもに神聖な性質によって存続します。このゆえに、それは聖なるものです。
- B. 5節と9節にある「祭司の体系」のギリシャ語である「ヒエラテウマ (hierateuma)」は、祭司の職務を指しているのではなく、祭司の集まり、祭司の一団、祭司の体系を指しています。
- C. 組み合わされた祭司の一団が、建造された霊の家です。
- D. 5節でペテロは、「霊の家」と「聖なる祭司の体系」という用語を用いて、召会生活を示しています:
 - 1. 個人的な方法で生きる霊的生活ではなく、団体的な方法で生きる霊的生活こそが、神の定められた御旨を成就し、神の願いを満足させることができます——エペソ 1:5, 9, 11, 3:11, 創 1:26。
 - 2. 神が求めているのは、神の住まいのための霊の家、神の奉仕のための祭司の一団、祭司の体系です。

IV. わたしたちは祭司として奉仕するとき、建造し建造される神と一になって、神を人の中へと建造し込み、人を神の中へと建造し込む必要があります——エペソ 3:16-17 前半, ヨハネ 14:2, 23:

- A. 「神と人を建造して一とならせることが、彼ら（祭司たち）の主の御前での働きです」（英文からの直訳）——詩歌 613 番 6節。

8. 神の建造のための祭司職の回復

- B. 神の新約エコノミーとは、手順を経て究極的に完成された三一の神がわたしたちの中へと造り込まれて、わたしたちの命また存在となることです——Ⅰテモテ 1:4, Ⅱコリント 13:14, エペソ 3:16-17 前半, ローマ 8:9-10, 6, 11:
1. 神の心の願いにしたがった神のエコノミーと目標は、ご自身を人の中へと建造し込み、人を神の中へと建造し込むことです——サムエル下 7:12-14 前半, エペソ 3:17 前半。
 2. 神のエコノミーにおける神の意図は、ご自身をキリストの中でわたしたちの存在の中へと建造し込むことです——サムエル下 7:12-14 前半, エペソ 3:17 前半, ヨハネ 14:20。
 3. 神はキリストの中でわたしたちの内側におられて、ご自身をわたしたちの存在の中へと建造し込み、わたしたちを彼の存在の中へと建造し込みます——サムエル下 7:12-14 前半, マタイ 16:18, ヨハネ 14:23, エペソ 3:17 前半。
- C. わたしたちの中へと建造し込まれ、構成し込まれたキリストは、神の家であり、またわたしたちの家でもあります。この家は相互の住まいであり、そこにおいて神とわたしたち、わたしたちと神は、共にミングリングされて、一つの実体となります——ヨハネ 14:2, 23, 15:4 前半。
- D. わたしたちの働きのあらゆる面において、すなわち、福音を宣べ伝えること、信者たちを養うこと、召会を設立すること、聖徒たちを成就することにおいて、その内在的な要素とは、建造し建造される神を、わたしたちが他の人たちの中へと供給することでなければなりません——マタイ 16:18, エペソ 3:17 前半:
1. もしわたしたちが、神はご自身を彼の選ばれた民の中へと造り込むことを願っていることを認識するなら、わたしたちの働きの目標は、建造し建造される神を他の人たちの中へと供給することとなります。それによって三一の神は、ご自身を彼らの存在の中へと建造し込みます——17 節前半。
 2. わたしたちは、わたしたちが主のために行なっている働きを再考慮すべきです。そして、わたしたちが主へともたらした人たちの中へと、三一の神の具体化としてのキリストがどれほど造り込まれたかを、問うべきです——ガラテヤ 4:19, コロサイ 1:28。
 3. わたしたちは、一つの事を実行する必要があります。すなわち、手順を経て究極的に完成された三一の神を、他の人たちの中へと供給する

8. 神の建造のための祭司職の回復

ことです。それによって彼は、ご自身を彼らの内なる人の中へと建造し込みます。わたしたちは、主がわたしたちにこのように働くことを教えてくださいと、祈る必要があります——Ⅱコリント 13:14. I コリント 3:9 前半, 10, 12。

4. わたしたちは、手順を経て究極的に完成された三一の神をもって召会を建造するとき、実はそれはわたしたちが建造しているのではなく、神がわたしたちを通して建造しているのであり、祭司としてのわたしたちを用いて、ご自身を他の人たちの中へと分与しているのです——使徒 9:15。
- E. 今日、わたしたちは神のために働くとき、神の建造にあずかるべきです。すなわち、神聖な要素を人の要素の中へと構成し込み、また人の要素を神聖な要素の中へと構成し込むべきです——ヨハネ 14:20, 15:4 前半, I ヨハネ 4:15。
- F. わたしたちが、生み、養い、成就し、建造するという四つの段階において、神の定められた道を労苦して実行するとき、わたしたちの働きは、手順を経て究極的に完成された三一の神に基づいていなければなりません。この三一の神は、ご自身を彼の選ばれた民の中へと建造し込み、彼らを彼の中へと建造し込んでいます——Ⅱコリント 13:14, エペソ 3:16-17 前半, 4:4-6。
- G. もしわたしたちが、建造し建造される神を、他の人へと供給して、彼らを神聖な命において成長させるなら、わたしたちはキリストのからだを建造しているのであり、それは新エルサレムを究極的に完成します——コロサイ 2:19, エペソ 4:15-16, 啓 21:10。

務めからの抜粋：

主の回復は、祭司職によって実際化される

祭司職においては、人の側では常に失敗があり、神の側では継続的な回復がありました。回復された創造に続いて、アダムは祭司職の真の地位に置かれました。アダムが失敗した時、神はやって来て、彼の贖いによって祭司職を回復しようとされました。アベルは、贖いによって祭司職へと戻されました。彼は贖われた祭司となって、神を享受し、神と接触し、神をもって機能し、神にあずかりました。

ついに、贖いの下にあるこの祭司職でさえ、人によって失われてしま

8. 神の建造のための祭司職の回復

いました。その時、神はやって来て、墮落した種族からアブラハムを選び出して、彼を祭司職へともたらしました。彼は、他の人たちのためにとりなす祭司となりました。創世記第 18 章は、神がアブラハムの天幕に来られたことを啓示しています。その天幕は至聖所でした。アブラハムは至聖所の中におり、主と一でした。ですから、彼はソドムと主のご計画とについてのビジョンを受けたのです。

徐々に、アブラハムの子孫であるイスラエルの子たちは、エジプトへと下って行きました。こうして、彼らは再び祭司職を失いました。しかし、主は過越を通して彼らを贖い、主が彼らを祭司の王国、あるいは祭司的王国にすることを意図しておられると告げました(出第 19 章)。そこには、ただ一人の祭司がいるだけではなく、祭司たちの王国があるのです。しかしながら、しばらくすると、イスラエルの国民すべてが、金の子牛を拝むことによって墮落しました。その時、祭司職は、国民すべてからレビの一部族へと向かいました。後ほど、エリの時代の時には、レビの部族の祭司たちの状況は、非常に貧弱でした。彼らはとても墮落してしまったので、祭司職のすべてを失ってしまいました。しかし、神は王たちや預言者たちを起こして、祭司職を回復しました。神と共にあったすべての王や預言者は、真の祭司職へともたらされました。

さて、わたしたちは新約にやって来ます。わたしたちがすでに見たように、すべての祭司の中の祭司である主イエスは、彼の贖いを通してわたしたちを祭司職へともたらしました。今や全召会が祭司の体系でなければなりません。しかしながら、この祭司の体系も失われてしまいました。ですから、召会生活の回復は、真の祭司の生活の回復です。それは、奉仕や、働きや、活動の事柄ではありません。それは、もっぱら祭司職の事柄です。わたしたちは回復されて、この祭司の生活の中へと入らなければなりません。それが意味することは、わたしたちが主との真実な交わりの中へともたらされなければならないということです。

明らかに、それは主のために何かを行なう事柄ではありませんし、運動でもありません。主の回復は、完全に祭司職の事柄です。わたしたちは主の臨在の中にもたらされなければなりません。わたしたちは、主をもって満たされ、浸透され、飽和されるまで、どのようにして主によって所有され、占有されるかを学ばなければなりません。あらゆる種類の働きについて忘れましょう。それはわたしたちの責任ではありません。それは「主の」責任です。わたしたちの責任は、ただ祭司の生活を顧みることです。

8. 神の建造のための祭司職の回復

聖書の中の記録は、人の思想や活動によって始められた神の働きは一つもないことをはっきりと示しています。神のすべての働きは、祭司職を通して始められました。わたしたちは、働き、活動、運動、方法、形式、さらには教えや賜物さえも忘れなければなりません。わたしたちの唯一の必要は、真の祭司職です。

わたしたちは、「上の部屋」、「パトモス島」、「川岸」、「荒野」にいる時間が必要です。これがもっぱら意味することは、わたしたちが主へと聖別され、閉じ込められるためにはいくらかの時間を必要とし、それによってわたしたちはただ自分の時間を費やすだけでなく、主の臨在の中でわたしたちの命またパーソンそのものを持つためです。その時、彼はわたしたちを占有し、わたしたちの観念すべては祭司職についての天的な見方へと変えられます。

わたしは再び言わなければなりません、主の回復は祭司職の回復です。召会生活の回復は、運動や、働きや、活動ではなく、祭司の生活の回復にほかなりません。主が必要としているのは、一群れの人々が、主の臨在の中へと、さらには主ご自身の中へともたらされて、ついには彼らが主と一になることです。その時、主は自由に流れ出て、主のみこころを成し遂げ、主の永遠の定められた御旨を成就します。(ウイットネス・リー全集、1966年第1巻(下)、祭司の体系、第2編)

すべての奉仕は祭司的でなければならない

主のためのすべての奉仕は、それがどのような種類の奉仕であれ、祭司的でなければなりません。主に対するわたしたちの奉仕は、祭司的な奉仕の種類のものでなければなりません。旧約における祭司たちは、祭司であっただけでなく、軍隊でもありました。ですから、その軍隊は祭司の軍隊でした。祭司たちは、神の御前に立って、彼に仕えるだけでなく、戦いを戦います。主の軍隊は祭司の軍隊です。これが意味することは、もしわたしたちが祭司でなければ、決して主のために戦いを戦うことはできないということです。わたしたちは神のために戦いを戦うために、祭司の体系とならなければなりません。

イスラエルの子たちがヨルダン川を渡ってカナンの地に入った後、最初の戦いは祭司たちによって戦われた戦いでした。それは、いかなる世俗的な武器によって戦われたのでもなく、契約の箱によって戦われました。契約の箱が、有力な武器でした。それに加えて、祭司たちは雄羊の角を用い

8. 神の建造のための祭司職の回復

ました。彼らは特殊な軍隊であり、特殊な武器をもって特殊な方法で戦いを戦いました。すべてが特殊でした。それは、わたしたちが戦いを戦う方法ではありません。しかしながら、後になってわたしたちは見ますが、わたしたちはこのような方法で戦いを戦うことを学ばなければなりません。基本的に言って、この軍隊が祭司の体系でした。わたしが意味しているのは、祭司の職務ではなく、契約の箱の導きの下で共に組み合わせられている祭司の軍隊、祭司の一団です。

わたしたちは新約に来るとき、使徒たちが祭司的な使徒であったことを見ます。使徒は祭司でなければなりません。もしわたしたちが、どのように祭司となるかを知らなければ、わたしたちは決して使徒となることはできません。使徒パウロは、彼が福音を宣べ伝えることにおいて祭司として奉仕したことを、わたしたちに告げています。彼が異邦人のすべての信者たちをささげ物として神にささげたのは、祭司としてでした。あなたがたはローマ人への手紙を何度も読んだことと、わたしは思います。しかし、ローマ人への手紙第15章16節は、パウロが祭司として福音を宣べ伝えたとわたしたちに告げていることに、あなたは気づいたことがあるでしょうか？ もしわたしたちが伝道者であるなら、わたしたちは祭司としてそのような者とならなければなりません。わたしたちは祭司的な伝道者とならなければなりません。もしわたしたちが祭司でなければ、わたしたちは決して十分な方法で福音を宣べ伝えることはできません。福音は、祭司的な伝道者によって宣べ伝えられなければなりません。

それから、使徒ペテロはわたしたちに告げていますが、彼と他の者たちは、まず祈りを、次に言葉の務めを堅く持ち続けなければなりませんでした。これが意味することは、言葉を供給するためには、わたしたちはまず祭司でなければならないということです。わたしたちは祭司として、自分自身を祈りにささげ、主の臨在の中で時間を費やさなければなりません。これが祭司の務めです。

あらゆる種類の奉仕の前に、わたしたちはまず主の臨在の中で祭司として仕えなければなりません。もしわたしたちが長老であるなら、祭司的な長老でなければなりません。もしわたしたちが執事あるいは女執事であるなら、まず祭司でなければなりません。祭司でないなら、わたしたちは決して召会の中で良い兄弟あるいは良い姉妹になることはできません。しかし、これでさえもすべてではありません。わたしたちは、祭司的な夫、祭司的な妻、祭司的な親でなければなりません。わたしたちはすべての事に

8. 神の建造のための祭司職の回復

において祭司的でなければなりません。

軍隊は祭司的でなければなりません。使徒は祭司的でなければなりません。伝道者は祭司的でなければなりません。言葉の務めは祭司的でなければなりません。長老と執事は祭司的でなければなりません。兄弟たちと姉妹たちは祭司的でなければなりません。夫、妻、親、子供たちは、祭司的でなければなりません。これがもっぱら意味することは、主の奉仕において、わたしたちはまず自分自身を主に開き、主の臨在の中で時間を費やさなければならぬということです。これによって、主はわたしたちを満たし、浸透し、さらにはわたしたちを飲み尽くすことさえできるようになり、それによってわたしたちは主と一になります。その時、彼はわたしたちの内容となり、わたしたちは彼の表現となります。わたしたちが戦いを戦っていようと、福音を宣べ伝えていようと、御言葉を教えていようと、長老や執事として奉仕していようと、彼はわたしたちを通して何かを言うことができ、またわたしたちの内側から何かを表現することができます。わたしたちは何であろうと、主が流れ出るための経路となります。これが、わたしたちの生きる方法、働きの方法、奉仕の方法でなければなりません。

祭司の務めだけが召会を建造することができる

召会が建造されるのは基本的に、教える務めによってではなく、祭司の務めによってです。すべての地方召会は、その地方の祭司の一団でなければなりません。わたしたちは多くの語りかけを必要とするのではなく、祭司の務めを必要とします。強い地方召会は、祈る人々で満ちている召会です。彼らは、語ることや教えることにおいてはあまり強くないかもしれませんが、祈ることではとても強いのです。彼らの霊が祈りにおいて強いのは、彼らが日常の歩みの中で祭司職を実行しているからです。彼らは、自分自身を主に開き、主に行って、彼の臨在の中で時間を費やすことを学んでいます。彼らは、主によって満たされて、さらには飲み尽くされることさえ学んでいます。ですから、彼らの霊はとても生き生きしており、とても活動的で、とても進取的です。彼らが集会に来るとき、何ものも彼らを消すことはできません。彼らの霊の内側には燃えているものがあります。

わたしがあなたがたに、主に何かを行なってもらうよう求めることによって祈るようにと勧めていると思わないでください。これはわたしの要

8. 神の建造のための祭司職の回復

点ではありません。真の祈りとは、主があなたのために、あるいは召会のために何かを行なってくれるよう求めることではありません。真の祈りとは、自分自身を主に開くことです。主に何かを行なってくれるよう求めるのではなく、ただ自分自身を主に開き、そして主にご自身をもってあなたを満たし、浸透していただきなさい。そうすれば、彼はあなたに祈るよう負担を与え、祈るための導きを与えてくださいます。そのとき、あなたの祈りは、あなたの思いにしたがっているのではなく、内なる感覚にしたがっているのです。

なぜわたしたちは祈る必要があるのでしょうか？ それは、わたしたちが何もすることができないからです。わたしたちは決して長老になることはできず、決して執事になることはできず、決して伝道者になることはできません。わたしたちには全くできないのです。ですから、わたしたちは祈らなければなりません。それは、わたしたちが主に信頼することを意味します。わたしたちが祈る必要のある第二の理由は、神はわたしたちを通して何かを行なわなければならないということ、わたしたちが認識しているからです。わたしたちがいなければ、神でさえ何も行なうことができません。これはとても注目すべきことです。わたしたちがいなければ、主は福音を宣べ伝えることができません。わたしたちがいなければ、彼は決して罪人を救うことができません。わたしたちは彼を必要としますが、彼はそれ以上にわたしたちを必要としています。ですから、わたしたちは祈らなければなりません。なぜなら、わたしたちは何も行なうことができず、またわたしたちがいなければ、神も何も行なうことができないからです。わたしたちが祈らなければならない第三の理由は、神がご自身を人とミングリングすることを願っておられるからです。ですから、わたしたちは祈って、自分自身を彼に開きます。それは、彼がご自身をわたしたちとミングリングするためです。神と人が祭司の祈りを通して共にミングリングされるとき、神は人を通して流れ出て、ご自身の働きを行なわれます。

ですから、わたしたちは見ますが、もしわたしたちが召会を建造しようとするなら、わたしたちが第一に認識しなければならないことは、わたしたちが何も行なうことができないということです。わたしたちは召会を建造することはできませんが、それでもそうしなければなりません。これが、わたしたちに祈るよう負担を与えるのです。わたしたちが祈らなければ、主でさえ召会を建造することができません。召会の建造は、神と人とのミングリングによってのみ達成されることができません。自分自身を主に

8. 神の建造のための祭司職の回復

ささげる人たちがいなければなりません。それは、主がご自身を彼らとミングリングするためです。その時、召会は建造されることができます。この建造は、言葉の務めによるものではなく、祭司職の務めによるものです。わたしたちはただ、祭司職を実行することを学ばなければなりません。そうすれば、わたしたちは結果を見るでしょう。

召会歴史や多くの霊的な人たちの伝記を読んだ時、わたしたちは同じ原則を見いだしました。それは、働きの事柄や務めをするという事柄ではありません。それは、祭司職を実行するという事柄です。わたしたちは祭司の務めを持たなければなりません。もちろん、わたしたちは外庭で働く人々を必要とします。しかし、わたしたちは知らなければなりません、外庭でのすべての活動は、聖所または至聖所にいる人たちの指示の下にあります。聖所または至聖所にいる祭司たちがいなければ、外庭で働く人々のための指示がありません。外側の活動はすべて、内側の祭司職の指示の下になければなりません。わたしたちは今日、この祭司の務めを必要とします。(ウイットネス・リー全集、1966年第1巻(下)、祭司の体系、第6編)

建造する神と建造される神を人に供給する

今日の回復でのわたしたちの働きとは、人々に神を供給することです。もちろん、わたしたちは罪人を救い、聖徒たちを養い、成就する必要があります。しかしながら、極めて重要なのは、わたしたちが人に神を供給することです。わたしたちが供給する神は、建造する神だけではありません。彼はまた建造される神でもあります。もしわたしたちがこのように神を供給することに失敗するなら、わたしたちの働きは木、草、刈り株とになってしまうでしょう(I コリント 3:12)。

わたしはあなたに、主のために行なっている今日のあなたの働きを再考してもらいたいと思います。おそらく、あなたはある地域を開拓し、多くの人を主にもたらしたことでしょう。しかし、わたしはあなたに一つの事をお尋ねします、「あなたが神にもたらした人たちの中へと、三一の神の具体化としてのキリストがどれほど造り込まれたのでしょうか?」。もしわたしたちが誠実で、真実であるなら、わたしたちはへりくだって、自分たちが神にもたらした人たちの中へと三一の神はあまり造り込まれていないと告白するでしょう。ですから、わたしたちは一つのことを実行する必要があります。すなわち、手順を経た三一の神を他の人たちの中へと供給することです。それによって彼は、ご自身を彼らの内なる人の中へと建造

8. 神の建造のための祭司職の回復

し込みます。わたしたちの働きのあらゆる面において、すなわち、福音を宣べ伝えること、信者たちを養うこと、聖徒たちを成就することにおいて、その内在的な要素とは、建造し建造される神を、わたしたちが他の人たちの中へと供給することでなければなりません。わたしは、主があなたにこのように働くことを教えてくださるようにと祈ることを、強くお勧めします。

手順を経た三一の神は、 ご自身を彼の贖われた民の中へと建造し込む

手順を経た三一の神は、キリストの中に具体化されており、究極的に完成された霊として実際化されています。これが、わたしたちが礼拝し、宣べ伝え、人々に供給する神です。今日、彼はご自身を彼の贖われた民の中へと建造して、家を生み出しておられます。その家は、要素である彼ご自身と、贖われ高く引き上げられた彼らの人性とから成っています。この家は、キリストのからだである召会です。この家は、キリストの拡大、拡張です。このキリストは、三一の神の具体化であり、その霊として実際化されています。わたしたちが、生み、養い、成就し、建造するという四つの段階において、神の定められた道を遂行する時、わたしたちの働きは、手順を経た三一の神に基づいていなければなりません。この三一の神は、ご自身を彼の選ばれた民の中へと建造し込んでいます。(サムエル記上下・ライフスタディ、メッセージ 30)